

# 白拍子からデリヘル嬢まで～「都市とフーズク」に関する歴史文化的な一考察～\*

A Historical Thought about The Obscene facilities on The Cities\*

大矢正樹\*\*

By Masaki OYA\*\*

「もしも文化が、人間の多少とも自由な精神活動の所産であるとするならば、江戸時代の文化といいうるもの、絵画・文学・演劇等々の大部分が、こうした場（遊郭・賭場・芝居小屋等々を指す（著者注））を媒介としてしか生まれ得なかったことを、一体、どう考えたらよいのか。」網野善彦<sup>1) - 5)</sup>

## 1. はじめに

1998年4月の風俗営業適正化法の改正によって、「無店舗型性風俗特殊営業（派遣型ファッションヘルスやアダルトビデオ等の通信販売）、映像送信型性風俗特殊営業（インターネット等を利用して客にポルノ映像を見せる営業）及び接客業務受託営業（風俗営業者等から委託を受けて風俗営業所等において接客業務の一部を行う営業）が新たに規制の対象<sup>6)</sup>」となったが、半面これらの事業を合法化することに他ならなかった。事実、派遣型ファッションヘルス（デリヘル）の届け出営業所数は、99年の2,700軒から2004年の22,000軒へと5年間で8倍に増加し、店舗型ファッションヘルスの約20倍となって

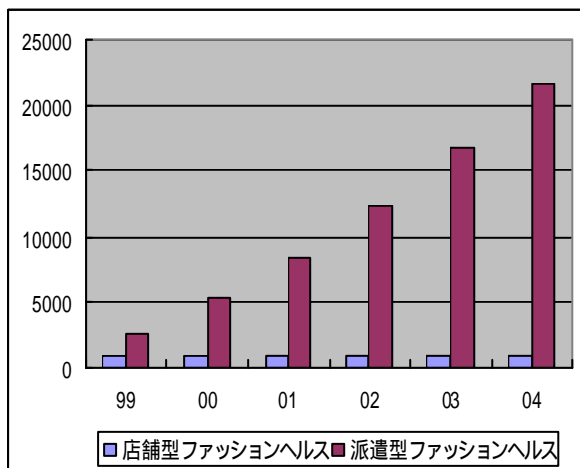


図 1.1 ファッションヘルス店舗数の推移

（出典）平成17年警察白書

\*キーワード：観光・余暇

\*\*正員，株式会社環境創造

（京都市中京区新町通四条上ル小結棚町426-1 新町錦ビル，TEL:075-254-8811，E-mail:oya@issr-kyoto.or.jp）

いる（図1.1）。インターネットと携帯電話の普及により、ピザを注文するのと同じ感覚でフーズクの宅配を頼むことも可能となり、フーズクは「フーズク街」を必ずしも必要としなくなったようにも思われる。風俗営業適正化法による規制の強化とデリヘルへの認可がセットとなって「見えないフーズク化」が進行しているとみてよい。この「見えないフーズク化」と一部大都市で進められているジェントリフィケーションによって、フーズク街も変化せざるを得ないと考えられる<sup>7)</sup>が、どう変貌していくのかは（少なくとも著者には）不明である。そこで今後のフーズク街を展望するための一助として、「都市とフーズク」が歴史的な文脈の中でどう推移してきたのか検討してみたい。

## 2. フーズクの歴史

### （1）古代～中世：遊女・傀儡・白拍子

#### 万葉集にみられる遊女

「娼婦は最古の職業」という古い言い回しによっても、売春が大昔からあったことはあきらかであるが<sup>8)</sup>、わが国の場合は飛鳥・奈良時代にまでさかのぼることができるようである。杉本によれば、わが国の売春に関する最古の記録は万葉集の次の和歌、「里人の見る目恥づかし左夫流児（さぶるこ）に惑わす君が宮出後姿（みやでしりぶり），（遊女の左夫流児にうつつをぬかしているから、あなたが役所に出勤していく後姿を近所の人々が笑っていて私は恥ずかしい、と嘆く妻の歌）」であるらしい。大宰府の長官として大伴旅人(665-731)が赴任し、彼を中心に文芸サロンが形成されたとき、酒席にはべって座をとりもった小嶋や土師（はにし）なども高級遊女であったという<sup>9)</sup>。

#### 院政期の遊女・傀儡・白拍子

平安時代末の院政期に入ると、遊女・傀儡・白拍子の存在が文献や絵巻物から確認できるようになる。今様狂いともいえるべき後白河法皇（1127-1192）の時代には、主に水辺に住んで小船を繰って客を求めた遊女と、陸地の宿々に拠った傀儡（くぐつ）に区別して呼ばれていたようである。旅船が泊ると、遊女達は小船に乗って漕ぎよせ、今様・朗詠を謡い、船客から衣服・絹・米な

どを求めたという。一方各宿の傀儡は今様・朗詠を謡って旅情をなぐさめ、酒席・枕席にはべるなど、水辺の遊女とほとんど変わらぬ営業形態であった<sup>10)</sup>。

遊女・傀儡は一括して呼ばれることが多かったのに対し、それと区別して呼ばれたのが白拍子である。遊女・傀儡の芸と異なり、舞を伴い、しかも尚武の世相に男装がうけて、平安終末期に急速に盛んになった。平家物語には、「遊び者のならひ、なにかはくるしかるべき。推参してみん」と仏御前が太政大臣平清盛を訪ねたことが記してある<sup>11)</sup>が、当時の白拍子の社会的地位と白拍子のプライドをみてとることができる。後藤は、遊女は古くは奈良朝廷が唐にならって設けた内教坊と何らかのつながりがあったが、それが衰微した院政期に、畿内・近国の遊女・傀儡・白拍子は雅楽寮付属の機関の管轄に入り、院や朝廷の御所に歌舞を奉仕する義務を負ったが、その代わりに諸国遍歴の自由交通権と安全保障を得たと考察している<sup>12)</sup>。網野は後藤説を踏まえて、「十世紀以降、文字を駆使して和歌を作るだけの教養と、歌舞などの芸能を身につけ、「性」そのものを「聖なるもの」として「好色」を芸能とする女性職能集団としての遊女が、内廷宮司の統括の下に姿を現してくる、と私は考えてみたい。白拍子はそのなかから生まれてきた女性の独自の芸能であった。<sup>13)</sup>」と述べている。

実際鎌倉時代には貴族の中にも白拍子を母とするものが多くみられ、それが何ら階位(出世)に影響を与えなかったこと、芸と売色が密接不可分な関係にあったことを後藤は強調している<sup>14)</sup>。

### 室町時代に始まる遊女に対する蔑視

14世紀には京に定住するようになったとみられる遊女達は、辻子君(ずしぎみ)と呼ばれ、その集住地は地獄が辻子(ちこくかつし)、加世が辻子と通称された。一休(1394-1481)は五山の形式化と墮落を激しく非難する一方で自らは酒屋・傾城(遊女)屋に出入りする風狂の僧であったが、「歌酒の客、此の処を過ぎる者、皆な風流之清事(情事ではない!)と為す也」と地獄が辻子、加世が辻子について詩っている<sup>15)</sup>。後藤は「地獄」という名称に「江戸時代に私娼を意味する「地獄」の名の淵源をすでにここにみることができるが、仏教的な罪障感を基調とした否定的な意味が感じられる<sup>15)</sup>」とし、「全く芸を持たず、京の町中の小路に軒をつらねて客を引き、その代償に各種の品物ではなく銭を受け取る、といった平安・鎌倉時代の伝統的な遊女とは異なる面が、蔑視を生んだ原因であろうが、その一番の原因はその白昼であったことである。昼と夜に厳重な区別を認めて生活していた中世の人々にとって、白昼公然と売色するといった行為は、当初まことにおぞましいものであったと思われる。<sup>15)</sup>」と述べている。

## (2) 近世～近代：花開く遊郭文化

### 吉原

隆慶一郎が週刊新潮誌上において小説『吉原御免状』を発表したのは1984年のことであった。網野善彦の「無縁・公界・楽」における研究を大胆に取り入れ、吉原が傀儡子(くづつ)の一族のアジールであること、そして傀儡子が中国に起源を持つ設定としている。傀儡子中国起源説は、11世紀初頭に書かれた大江匡房の『傀儡子記』が初出であり、柳田国男、南方熊楠等の研究がある<sup>16)</sup>ので、隆はそれらを参考にしたと思われる。後に網野も、傀儡子を遊里に重ね、遊里を「公界」の最後のとりでであることを認めるのが「家康」となった「道々の輩」であるという構想の非凡さを賞賛している<sup>17)</sup>。陸上の遊女が平安時代末に傀儡と呼ばれていたことを知る者にとって(当時私は知らなかったけど)、隆慶一郎の設定は無理のないものと受け止められたと思われる(多分)。

冒頭に述べたように吉原に代表される遊郭は江戸文化を生む母体となったが、ここでは数点を指摘することに止めたい。第1は、吉原の認可は幕府による「集娼制度」の始まりであり、この政策は明治に入ってさらに強化され、現在の風俗営業適正化法による規制という形で継続しているということである。第2は吉原は必ずしも売春の場としてだけではなく、明治以降のいわゆる「三業(遊女屋、引手茶屋、芸者屋)地」としての性格を持っていたということである。福田は吉原で芸者と割間とだけ遊んで帰る客は「粋な客」と尊敬されたが、江戸期においても同様だったのではあるまいか。さらに吉原の遊女は花魁と呼ばれたが、大店の高級花魁は歌舞音曲はもちろんのこと、生け花、茶の湯、書道、歌道など教養があって、とても一般の女性の及ぶところではなかったようである<sup>18)</sup>。第3は吉原が江戸時代の一般庶民にとって今の時代のディズニーランドと同じ役割を果たしていたということである。花見や祭りのときは、女性も子供も吉原に足を運んだのである<sup>19)</sup>。

### 近代：鉄道が盛り場に与えた影響

盛り場が現在のような3層構造をとるようになったのは、明治以降の鉄道の普及と密接に関係しており、関西においては現在と同じ鉄道網が概成した1920年代には、梅田、千日前、難波、心斎橋筋、道頓堀に盛り場が形成されていった。加藤によれば、「1920年代の盛り場は、もはや江戸時代の悪所を彷彿とさせるような場所ではなく、映画館やカフェーを中心に、バー、ダンスホール、喫茶店、洋食店、十銭ストアをはじめとするさまざまな消費施設が集まって、現在にも通じる盛り場独特の風景」を創りだしていた<sup>20)</sup>。そしてその周縁には遊郭や待合、私娼窟が集積していたのである<sup>21)</sup>。

### 街のインキュベーター

戦後のいわゆる「特殊飲食店」は、戦前までは「銘酒

屋」と呼ばれた。「御料理」という看板を掲げながら料理を出さない料理屋であり、私娼を置いて売春させていた店が「銘酒屋」である<sup>22)</sup>。加藤によれば、新開地に発生した「銘酒屋」はその町の発展をたすけ、「並」の街区ができると消えていくと思われていたが、実際は三業地として発達した例が多いという<sup>22)</sup>。戦前まではフーズクがまだまだ盛り場を作る力をもっていたとみることができる。

### (3) 現代：ソープ誕生からデリヘル公認まで

1958年4月1日の売春防止法の完全施行（売春防止法は1956年に成立し、2年間の猶予期間が設けられていた）は、わが国の遊女の歴史に革命をもたらすものであった。そのわりに何故売春防止法が制定されたのかが、あまりつまりびらきにされていないのが不思議ではあるが、多分著者が知らないだけであろう。

私見によれば、売春防止法下におけるソープ・特殊飲食街の存在と憲法第9条下における自衛隊の存在は相似形のように思われる。内田樹がダブルスタンダードの効用について述べているのと同じ理由で、著者も売春防止法には賛成である<sup>23)</sup>（40年以上昔には、選挙には売春防止法撤廃を唱えて立候補する人が必ずいたが、どこにいったのだろう。）。

ソープランドは昔トルコ風呂（風俗営業取締法では個室付浴場と呼んだ）と称したが、ホンバンと称する売春行為が通常化した結果、1958年から66年にかけて増え続けた。このため66年に風俗営業取締法は改正され、都道府県条例で定める区域以外は禁止された。「泡おどり」に代表される新テクニクの開発<sup>24)</sup>（川崎堀の内のトルコ嬢が開発したとされる。）は、需要増加に拍車をかけ1970年代初頭には最盛期を迎えた。

80年代は若者と女性が盛り場の主役となった時代である。居酒屋チェーンが台頭し、女性をターゲットとした新感覚のバーも出現した。今までは男しか入らないような牛丼、焼き鳥や等に入出入りする女性もあらわれ「おやじギャル」と呼ばれるようになった。一方意識面での変化もまた著しかった。81年の「ノーパン喫茶」ブームは、「時給がよければパンツを脱ぐのも平気」という若い女性がいかに多いかという事実を明らかにし、大人たちは驚かされることとなった。

80年代にはフーズク業界も多様化し、売春防止法には抵触しないファッションヘルスが登場した。その手軽さとソープに比べヘルス嬢が若いことから人気をかくし、一部では「フードル（フーズクのアイドル）」という言葉が登場したほどであった。そして89年のエイズ騒動もあってソープの需要は激減し、ファッションヘルスがフーズクの主流となった。そして、ネットとケータイの時代を反映してデリヘルが急成長を遂げたことは、「1.

はじめに」で既に述べた。フーズクはフーズク街がなくても存立することが可能になったことは、歴史的には大きな意味を持っている。

### 3. 終わりに～フーズク街の今後について～

本稿はフーズクの歴史的な総括を通して、フーズク街の今後の展望を試みたが、著者の力不足で意を尽くすことができなかったことをまずお詫びしたい。フーズク街を歩くときのアジールの感覚は近年急速に薄れてきたように思われるが、それがバブル不況以降の需要の低迷によるものかどうか、判然としないところがある。結論だけ先に言えば、「1.はじめに」で述べたように国の「見えないフーズク化」政策によって、フーズク街が今後拡大することはないことだけは確実である。フェミニズムがポリティカリー・コレクトとなり、グローバル・スタンダードの名の下にアメリカ化が進む傾向にあることを考慮すると、「見えないフーズク化」によって現在あるフーズク街を維持すること自体に意義がでてくる時代がでてくる可能性がある。そのような時代にあって、都市のアジールを何処に求めるかが課題になると思われる。

### 注

- 1) 網野善彦:江戸時代の縁切寺, [増補] 無縁・公界・楽 - 日本中世の自由と平和 -, 平凡社ライブラリー, 平凡社, p.31, 1996
- 2) 本稿はいわゆる「網野史学」にその発想の根を負っている。網野善彦は従来の農民中心主義の歴史観に意義を唱え、海民、芸能民、商工民など多くの職能民に光をあて、「無縁・公界・楽」の存在を実証的に示した歴史家であるとともに、「原初的な自由」について提起した思想家でもあった。網野によれば、吉原に代表される遊郭は一種のアジール（治外法権の場）であり、「無縁の輩（ともがら）」による「自由」が存在した場であった。論理の飛躍を恐れずに言えば、盛り場を徘徊する楽しみはこのような「自由」の感覚に由来しているのではあるまいか。
- 3) 網野史学に対して歴史学の内部では否定的であることは著者も十分承知している。赤坂は、「歴史研究者が発する「先生は網野さんの弟子だから」という言

葉が、からかい半分の痛烈な批判となり、大学教授が大学院生に対して、「少なくともいまは、網野さんの引用はやめた方がいい」と指導をしている4）」とその現状について述べている。実際、1978年に「無縁・公界・楽」が発表されて以降、安良城盛昭（あらかきもりあき）氏を筆頭に歴史学会から反論が寄せられ5）、それに対する反論として80ページに及ぶ補注を付して1987年に「[増補]無縁・公界・楽 - 日本中世の自由と平和 - 」が出版されたのであった。

- 4) 赤坂憲夫：網野史学の孤立をめぐって、追悼記録網野善彦，洋泉社，p.16
- 5) 安良城盛昭：天皇・天皇制・百姓・沖縄，吉川弘文館，1989，は480頁にのぼる安良城氏の論文集であるが、そのうちの80頁が網野論文批判にあてられている。その妥当性を判断する能力は著者にはないが、安良城氏の批判に逐一応答した網野氏は本当に真摯な性格であったと思わざるを得ない。例えば、本書の第一論文「網野善彦氏の近業についての批判的検討」は「歴史学研究」538号（1985）に掲載されたが、その最後は次のような、アジビラ以下の水準の文章でしめくくられている（脱稿時安良城氏は57歳）。「最後に一つ網野氏にお願いがある。＜日本の人民生活に真に根ざした「無縁」の思想は、失うべきものは「有主」の鉄鎖しかもたない、現代の無縁の人々によって、そこから必ず創造されるであろう＞といった発言については、社会主義になると住宅から預金にいたるまで一切没収されて、国民は無所有の状態になる、といったかたちで一部の反共的デマゴギーに悪用されかねないから、慎重であってほしいとお願いする次第である。日本の、世界の、そして人類の未来は、「無所有」のルンペンプロレタリアートではなくて、労働する「所有主体」としての人民によってのみ切り拓かれるであろう、という点についての誤解を広めてはならない、と考えるからである。」
- 6) 警察庁：平成11年警察白書，第2章第5節「良好な生活環境の保持」より引用  
<http://www.npa.go.jp/hakusyo/h11/h110205.html>
- 7) 例えば、新宿・歌舞伎町では再開発計画が始動し、新宿ゴールデン街が消える可能性もあると報じられている（2006年9月19日朝日新聞）。[http://www.geocities.jp/okutei\\_net/asahicom.html](http://www.geocities.jp/okutei_net/asahicom.html)
- 8) Vern and Bonnie Bullough（香川檀他訳）：売春の社会史，p.15，筑摩書房，1991。なおこの本の中で著者達は古代メソポタミアのギルガメシュ叙事詩（紀元前2000年頃）に、既に娼婦の記録があると述べている。

- 9) 杉本苑子：女性はどう学んできたか，集英社新書（集英社），pp198-199，1999
- 10) 後藤紀彦：遊女と朝廷・貴族，週刊朝日百科日本の歴史中世 遊女・傀儡・白拍子，朝日新聞社，pp.72-75，1986
- 11) 平家物語第五句義王，新潮日本古典集成平家物語上，新潮社，p.57，1979。「義王」については「祇王」とする場合が多い（文献10では祇王を採用している）が、本稿では新潮社版によった。
- 12) 後藤紀彦：遊女と朝廷・貴族，週刊朝日百科日本の歴史中世 遊女・傀儡・白拍子，朝日新聞社，p.82，1986
- 13) 網野善彦：遊女と女房，中世の非人と遊女，講談社学術文庫，講談社，p.236，2005
- 14) 後藤紀彦：遊女と朝廷・貴族，週刊朝日百科日本の歴史中世 遊女・傀儡・白拍子，朝日新聞社，p.77，1986
- 15) 後藤紀彦：立君・辻子君，週刊朝日百科日本の歴史中世 遊女・傀儡・白拍子，朝日新聞社，p.88-89，1986
- 16) 杉山二郎：「ジプシーと傀儡子」および「和製ジプシーの従輩」，遊民の系譜，青土社，pp.139-166，1988
- 17) 網野善彦：「無縁・公界・楽」の行方 - 隆慶一郎とその世界，歴史と出会う，洋泉社，pp.104-107，2000
- 18) 福田利子：「吉原の花魁」および「吉原の仕組み」，吉原はこんなところでございました，主婦と生活社，p p.36-37，pp.66-68
- 19) 田中優子：輝けるテーマパーク・吉原，歴史の中の遊女・被差別民，新人物往来社，pp.62-73，2006
- 20) 加藤政洋：大阪のスラムと盛り場，創元社，pp.192-193，2002。
- 21) 「待合」は芸者を呼んでの「遊び」が主流だったが、呼んだ芸者が了解すれば同衾することもできた。また現在のラブホテルのように利用することもできた。待合のラブホ的利用については荷風の『つゆのあとさき』、私娼窟についてはこれも荷風の『？東綺譚』を参照されたい。
- 22) 加藤政洋：花街 - 異空間の都市史，朝日新聞社，pp.108-115
- 23) 内田樹：憲法の話，内田樹の研究室，2007.05.03，<http://blog.tatsuru.com/>  
内田は同エッセイの中で「戦後日本が九条と自衛隊の「葛藤」を通じて国力を順調に育成してきたプロセスは「世界政治史上まれに見る狡猾な政治的マネーヴァー」と高く評価している。同様に、売春防止法下で、ソーブランド・特殊飲食店街を維持してきたプロセスを著者は「官・民合作の知恵」と評価したい。
- 24) 広岡敬一：トルコロジー，晩聲社，1978 によれば、ソーブのテクニクとしては、「泡おどり」「潜望鏡」「パイズリ」等があるらしい。